



オンライン説明会

2024年6月13日（木）16:00～16:40

Q. なぜ生き物の調査をするの？

A. **気候変動**が、生き物を取り巻く自然生態系にどのような**影響**を及ぼすかを調べていくためです。

気候変動適応法第7条に基づき、「**気候変動適応計画**」が令和3年10月に閣議決定されました。下記に「気候変動適応計画」第2章に記載されている分野別の影響と適応策の概要から本調査に関連する部分をご紹介します

分野別の影響

⑤生物季節、分布・個体群の変動

- 植物の開花の早まりや動物の初鳴きの早まりなど、動植物の生物季節の変動について多数の報告が確認されている。気候変動により、種の移動・局地的な消滅による種間相互作用の変化や、生育地の分断化による種の絶滅を招く可能性がある。

適応策

⑤生物季節、分布・個体群の変動

- 植物の開花等の生物季節変化を把握するため研究機関やNPO等と協力した参加型モニタリング調査を継続、強化する。生物が移動・分散する経路を確保する生態系ネットワークの形成を推進し、その際に外来種やニホンジカの分布拡大のおそれとその影響を考慮する。

Q. 気候変動適応って？

A. 気候変動対策は**緩和**と**適応**があります。**「適応」**は気候変動の**影響に備える**ことです。

地球温暖化の対策には、温室効果ガス排出量を削減する「緩和」と、気候変化に対して自然生態系や社会・経済システムを調整することにより気候変動の悪影響を軽減する「適応」があります。「適応」とは、**「現実の気候または予想される気候およびその影響に対する調整の過程。人間システムにおいて、適応は害を和らげもしくは回避し、または有益な機会を活かそうとする。一部の自然システムにおいては、人間の介入は予想される気候やその影響に対する調整を促進する可能性がある」と定義されています。**

緩和とは？
原因を少なく

2つの気候変動対策

適応とは？
影響に備える

緩和策の例

- 節電・省エネ
- エコカーの普及
- 再生可能エネルギーの活用
- 森林を増やす
- 温室効果ガスを減らす

適応策の例

- 感染症予防のため虫刺されに注意
- 熱中症予防
- 災害に備える
- 高温でも育つ農作物の品種開発や栽培
- 水利利用の工夫

気候変動による人間社会や自然への影響を回避するためには、温室効果ガスの排出を削減し、気候変動を極力抑制すること（緩和）が重要です。

緩和を最大限実施しても避けられない気候変動の影響に対しては、その被害を軽減し、よりよい生活ができるようにしていくこと（適応）が重要です。

出典：気候変動適応情報プラットフォーム（A-PLAT）

適応がなぜ必要か

気候変動を抑えるためには、**緩和が最も必要かつ重要な対策**ですが、効果が現れるには長い時間がかかるため、早急に取り組みを開始し、長期にわたり強化・継続していかなければなりません。一方、過去に排出された温室効果ガスの大気中への蓄積があり、ある程度の気候変動は避けられません。気候変動によって、こうした異常気象が将来は頻繁に発生したり深刻化したりすることが懸念されており、変化する気候のもとで**悪影響を最小限に抑える「適応」が不可欠**なのです。もちろん、変化する気候が私たちにとって有利に働くことを活用する適応も考えられます。気候変動がもたらす正の影響も生かしていく視点も大切です。

適応への取り組み

「世界の平均気温の上昇を1.5℃に抑える」という目標が明確になっている緩和と異なり、**適応には世界共通の明確な目標が定められていません**。これは、気候変動の影響が地域の地理的、経済的、社会的な条件などによってさまざまな形で顕在化することから、取るべき対策も国ごとに異なるためです。このため日本では、国全体が気候変動の影響を回避し低減することを目的として「気候変動適応法」を2018年に制定しました。気候変動適応法では、各地域が自然や社会経済の状況に合わせて適応策を実施することが盛り込まれています。一方、将来の気候変動の影響に備えるため、各自治体が気候変動適応法に従って地域気候変動適応計画を策定しています。気候変動の影響は私達の社会に深刻な影響を及ぼすため、**日本でも緩和と適応の両輪で気候変動の課題に社会全体で取り組むことが求められています**。

Q. 調査はいつするの？

A. 調査は**6月20日**から**11月30日**までの**約5ヶ月**です。

生き物を取り巻く自然生態系における気候変動による影響を調査するために、みなさんの身の回りにいる生き物を継続的に観察を行っています。

みなさんが参加する継続的な広域の生物調査モデル構築に向けた調査で、4年前より実施しています。

生き物調査は、スマートフォンアプリの”iNaturalist”を用いて行います。

【調査の概要】

調査タイトル	気候変動探偵局 生き物大移住計画を調査せよ！ 中部7県広域ミッション2024
意義	継続性をもって広域で実施していくための市民参加型の生物季節の調査モデルを作ること
目的	生物季節の調査モデルづくりのために、どのような調査のやり方がよいかを試行する
調査期間	2024年6月20日（木）～11月30日（土）
調査場所	中部7県内で、調査対象生物を観察した場所
調査参加者	一般市民、自治体等職員
調査方法	スマートフォンアプリ“iNaturalist”を使用 調査対象生物を発見した際に、位置情報とともに報告する
調査対象	生き物全て（広く生き物全般を調査対象とするが、分析対象とするのはセミのみ）

Q. 調査に参加してみたい！どうしたら参加できるの？

A. 「iNaturalist」アプリをインストールするだけ。誰でも無料※で参加できます。

※アプリのインストールや投稿にかかる通信費は別途必要です。
※PCでの参加も可能ですが、アプリのインストールを推奨します。

iNaturalistについて

自然とつながる！
世界で最も人気のある自然アプリの1つであるiNaturalistは、あなたの周りの植物や動物を識別するのに役立ちます。100万人を超える科学者やナチュラリストのコミュニティとつながり、自然についてより深く学ぶことができます！さらに、あなたの観察を記録し共有することで、自然をよりよく理解し保護するために働く科学者のための研究品質のデータを作成することができます。
iNaturalistはカリフォルニア科学アカデミーとナショナルジオグラフィック協会による共同イニシアチブです。



これがiNaturalistの背後にあるビジョンです。野外で発見したことを記録するのが好きな方、あるいは生命について学ぶのが好きな方、ぜひご参加ください！

出典：「iNaturalist」HPより（事務局にて日本語に翻訳）

iNaturalistのインストール

iOS(iPhone)



Android



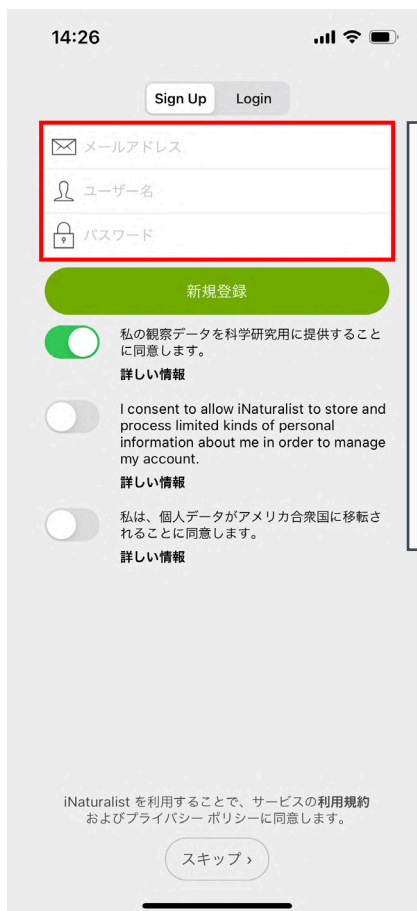
PCなどからのアクセスはこちら → <https://www.inaturalist.org/>

Q. アプリをインストールしたけど、このあとどうしたらいいの？

A. はじめての方はユーザー登録、登録が完了したら**プロジェクト**に参加してください。



インストール後、アプリを開くとタイトル画面が表示されるので、左にスワイプしてください



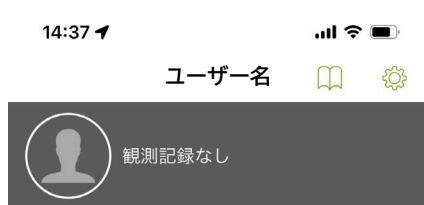
左の赤枠の中に
・メールアドレス
・ユーザー名
・パスワード
を入力して登録します。
ユーザー名はiNaturalist
上で**他のユーザーに表示
されます**ので、公開して
差し支えないものとして
ください。



この画面が表示されたら登録完了です。
プロジェクトへの参加に進んでください。

Q. アプリをインストールしたけど、このあとどうしたらいいの？

A. はじめての方はユーザー登録、登録が完了したら**プロジェクト**に参加してください。

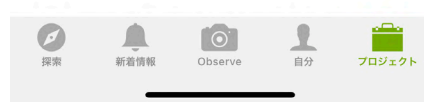
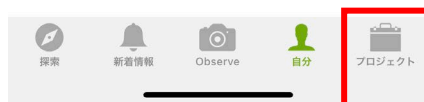


「プロジェクト」タブを開き、赤枠のところから参加したいプロジェクトを検索します。

「気候変動探偵局」と入力して出てきた検索結果をタップしてください。

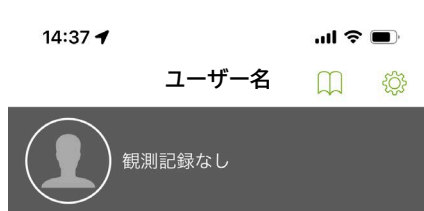
タップするとプロジェクトページに移動します。上部の「参加する」をタップすれば完了です。

プロジェクトの参加は右下の「プロジェクト」タブから行います。

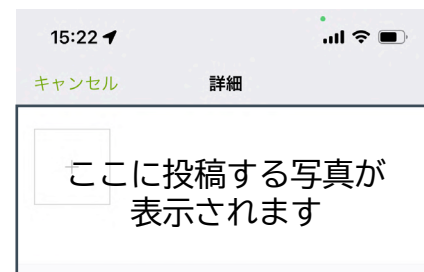
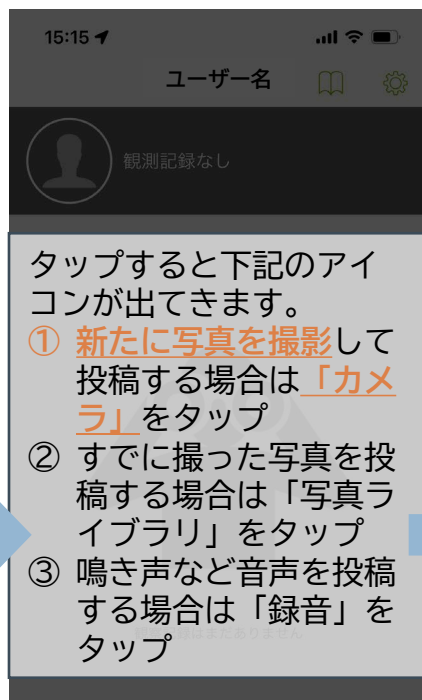


Q. プロジェクトに参加したけど、何をしたらいいの？

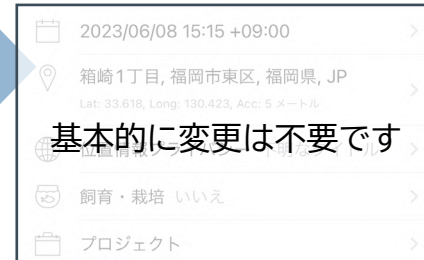
A. あとは**見つけた生き物を投稿**するだけ。でもいくつか**お願い**があります。



見つけた生き物の投稿は下の「**Observe**」から行います。(鳴き声等、音声の投稿も可能！写真や音声がなくとも投稿可能です。)



生き物の名前（種名）を入力します



共有で押下で投稿します

タップすると生き物の名前の候補が表示されます



Q. プロジェクトに参加したけど、何をしたらいいの？

A. あとは**見つけた生き物を投稿**するだけ。でもいくつか**お願い**があります。

お願い1：調査期間は2024年6月20日（木）～11月30日（土）までです！

- 今年度の調査期間は上記の約5ヶ月となっています。上記の期間外もプロジェクトへの投稿自体は可能ですが、集計などの対象となりませんのでご了承ください。

お願い2：調査の対象となる場所は中部7県となります！

- 調査の対象となる場所は中部7県（富山・石川・福井・長野・岐阜・愛知・三重）となります。このエリア以外の投稿は集計などの対象となりませんのでご了承ください。なお、中部7県内であれば、どこでもOKです。

お願い3：調査対象は生き物全般。でも、特にセミの投稿をお待ちしています！

- 調査対象は【生き物】すべて。昆虫でも植物でもOKです。特に【セミ】の情報を探しています！
- ぬけがらの投稿もできます。ぬけがらを投稿するときは、こちらの6～7ページも参考にしてみてください。
【'95 身近な生き物調査 調査の手引き（環境庁）】 https://www.biodic.go.jp/reports2/5th/95_tebiki/5_95_tebiki.pdf

Q. プロジェクトに参加したけど、何をしたらいいの？

A. あとは**見つけた生き物を投稿**するだけ。でもいくつか**お願い**があります。

お願い4：初鳴きは特に大事！観察記録にぜひメモを！

- 初鳴きは気候変動の大事な指標になります。今年初めて鳴き声を聞いたセミの写真や音声を投稿するときは、投稿の際の「メモ」欄に「初鳴き」と書いてください。

お願い5：リピーターの皆様へ。継続は力なり！過去に投稿した場所での継続調査にご協力ください。

- 2021～2023年度の調査にご協力いただいた皆様へ、同じ場所で過去の結果と比較をするために、過去に調査した場所周辺での調査にもご協力をお願いします。
- もちろん、新しい場所での観察記録についても大募集です。投稿をお待ちしています。

お願い6：投稿は野生のものに限ります。飼育動物や栽培植物の投稿はご遠慮ください。

- 今回の調査は、実際に「今」どこに生き物が住んでいるかを調査しているものとなりますので、野外で見つけた生き物のみの投稿をお願いします。
- 自宅などで栽培している植物や飼育している動物、図鑑や標本などの投稿は調査対象外となりますので、投稿はご遠慮ください。

お願い7：調査時にはマナーと安全を守って行動を！

- 野外で生き物を探るときは、熱中症対策と蜂などへの注意を万全にしてください。また、調査中の事故やケガには十分注意し、立入禁止区域や危険なところには近づかないなど、マナーと安全を守った行動を心がけてください。

Q. セミはいつみられるの？






A. セミの種類によって違いますが、**早朝や夕方**の薄明るい時間帯に多くみられます

セミの種別の活動時期や時間帯は様々です！

★たとえば、こんなセミを探しています★

特にセミの情報を募集中です！



種名	ヒグラシ	ツクツクボウシ	アブラゼミ	ミンミンゼミ	クマゼミ
成虫					
鳴き声	カナカナカナ…	ツクツクホーン ツクツクホーシ…	ジジジジジ…	ミンミンミン ミンミー…	シャーシャーシャー シャー…
主な活動 次期	7月～9月頃 早朝と夕方	7月～11月頃 午前中と夕方	7月～10月頃 早朝と午後～夕方	7月～10月頃 午前～午後 (地域により異なる)	7月～9月頃 早朝～午前中
見られる 場所	平地から山地にかけ ての薄暗い林の中	街なかや低山地	平地から山地、人の家 の庭先から雑木林等	低山地から山地にか けての高い木の幹	温暖な地域の低地や 低山地、街なかの公園

セミごとに活動時間帯
や鳴き声は違います！
見つけたら耳を澄まし
てみてください！

これまでの調査の結果の振り返り ～生き物全体の観察報告状況～

- プロジェクト（気候変動探偵局）に登録した参加者から報告された生き物のデータを収集しました。
- 2023年度の観察者数は2022年度より8割程度増加し、2021年度と比べる倍となっています。
- 分類群別での投稿数をみると、昆虫綱が最も多く、約半数を占めています。その他、植物界は毎年1,500を超える投稿数となっています。日常的にiNaturalistを利用しているコアユーザーのプロジェクト参加の影響が大きいです。

投稿全体	2021年度	2022年度	2023年度
観察総数	5,994件	8,881件	10,252件
観察種	1,737種	2,231種	4,136種
観察者数	273名	300名	543名
観察報告数	平均値 21件、中央値 2件 最高値 606件	平均値 29件、中央値 3件 最高値 2,888件	平均値 19件、中央値 3件 最高値 1,033件

分類群	2021年度	2022年度	2023年度
Protozoa 原生動物	3	4	24
Plantae 植物界	1,541	1,582	2,511
Fungi 菌界	242	450	833
Animalia 動物界	105	110	204
Mollusca 軟体動物門	49	70	86
Actinopterygii 条鰭綱	51	56	76
Amphibia 両生綱	406	392	484
Arachnida クモ綱	143	178	287
Aves 鳥綱	182	211	535
Insecta 昆虫綱	3,611	3,301	4,984
Mammalia 哺乳綱	44	38	74
Reptilia 爬虫綱	56	89	136
不明	87	5	18
総計	6,520	6,486	10,252

これまでの調査の結果の振り返り ～セミの観察報告状況～

- 2023年度のセミの観察者は70名で、人数は2022年度より増加しましたが、プロジェクト（気候変動探偵局）参加者全体に占める割合は12.9%と10ポイント近く減少しています。
- 観察数についても2023年度は280件と、2021年度、2022年度と比較し約3割減少しています。投稿数の多いコアユーザーの減少による影響が大きいことが考えられます（累計率50%以上：2021年上位8名、2022年上位5名、2023年上位10名）。
- リピート率は、2023年度基準で、3年すべて参加が17.1%、2年参加が15.7%で32.9%となっています。

セミ	2021年度	2022年度	2023年度
セミ観察数	410件	402件	280件
観察者数 (プロジェクト全体の参加者に占める割合)	89名 (32.6%)	64名 (21.3%)	70名 (12.9%)
観察報告数	平均値 4.6件 最高値 57件	平均値 6.2件 最高値 80件	平均値 4.0件 最高値 20件
観察対象(セミ)	成体(生体または死骸)60% 鳴き声23% 抜け殻14%	成体(生体または死骸)51% 鳴き声29% 抜け殻10%	成体(生体または死骸)48% 鳴き声33% 抜け殻16%

これまでの調査の結果の振り返り ～セミの種類別の観察報告状況～

- 過去3年間に観察されたセミの記録の概括は以下の通りです。
- 観察数では特にアブラゼミやツクツクボウシ、ミンミンゼミの減少が大きいです。

上科	科	亜科	族	属	種名	2021	2022	2023	計
セミ上科						12	0	6	18
	セミ科					8	0	4	12
		セミ亜科				26	0	11	37
			ニイニゼミ族			0	0	1	1
				ニイニゼミ属		0	0	0	0
					ニイニゼミ	35	55	49	139
			クマゼミ族			1	0	0	1
				エゾゼミ属		3	0	2	5
					コエゾゼミ	1	0	6	7
					エゾゼミ	11	5	5	21
					アカエゾゼミ	0	0	1	1
				クマゼミ属		0	0	0	0
					クマゼミ	50	49	44	143
					スジアカクマゼミ	0	6	1	7
			アブラゼミ族			0	0	1	1
				アブラゼミ属		5	0	0	5
					アブラゼミ	156	180	82	418
			ヒグラシ族			0	0	0	0
				ハルゼミ属		0	0	1	1
					エゾハルゼミ	0	0	1	1
				ヒメハルゼミ属		0	0	0	0
					ヒメハルゼミ	0	1	0	1
				ヒグラシ属		0	0	0	0
					ヒグラシ	23	15	16	54
			ツクツクボウシ族			0	0	0	0
				ツクツクボウシ属		0	0	0	0
					ツクツクボウシ	49	60	29	138
			ミンミンゼミ族			0	0	0	0
				ミンミンゼミ属		0	0	0	0
					ミンミンゼミ	27	30	19	76
		チッチゼミ亜科				0	0	0	0
			チッチゼミ族			0	0	0	0
				チッチゼミ属		0	0	0	0
					チッチゼミ	0	1	1	2

※状況により種まで同定できていない場合、その上位までの同定にとどまっている場合があります。

これまでの調査の結果の振り返り ～セミの種類別の観察報告状況～

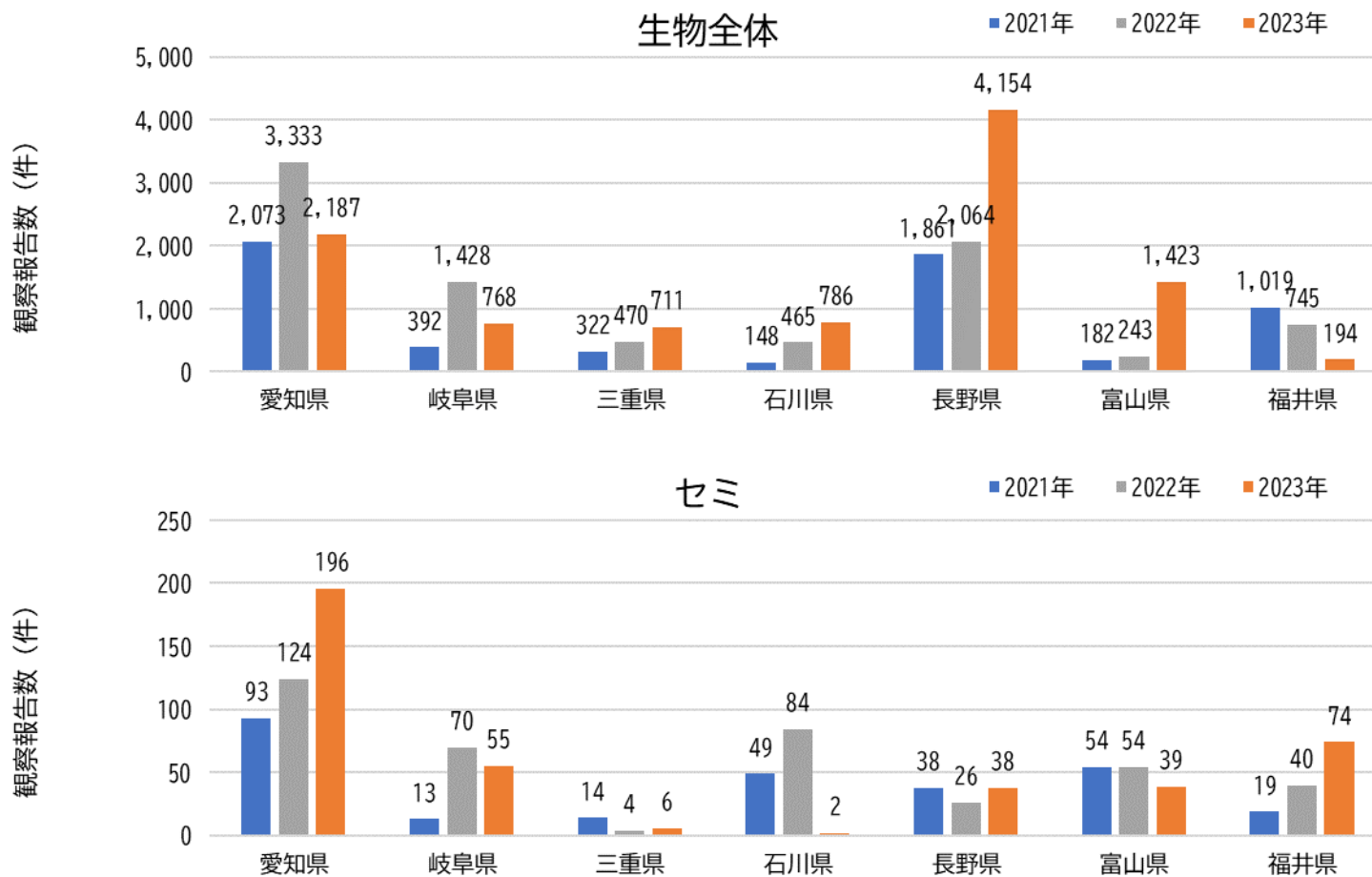
- 調査年度ごとの構成比をみると、観察数同様に、アブラゼミの減少が大きいです。
- ニイニゼミやクマゼミなどは観測総数に占める割合は増加しています。

上科	科	亜科	族	属	種名	2021	2022	2023	計
セミ上科						2.9%	0.0%	2.1%	1.7%
	セミ科					2.0%	0.0%	1.4%	1.1%
		セミ亜科				6.4%	0.0%	3.9%	3.4%
			ニイニゼミ族			0.0%	0.0%	0.4%	0.1%
				ニイニゼミ属		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
					ニイニゼミ	8.6%	13.7%	17.5%	12.8%
			クマゼミ族			0.2%	0.0%	0.0%	0.1%
				エゾゼミ属		0.7%	0.0%	0.7%	0.5%
					コエゾゼミ	0.2%	0.0%	2.1%	0.6%
					エゾゼミ	2.7%	1.2%	1.8%	1.9%
					アカエゾゼミ	0.0%	0.0%	0.4%	0.1%
				クマゼミ属		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
					クマゼミ	12.3%	12.2%	15.7%	13.1%
					スジアカクマゼミ	0.0%	1.5%	0.4%	0.6%
			アブラゼミ族			0.0%	0.0%	0.4%	0.1%
				アブラゼミ属		1.2%	0.0%	0.0%	0.5%
					アブラゼミ	38.3%	44.8%	29.3%	38.4%
			ヒグラシ族			0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
				ハルゼミ属		0.0%	0.0%	0.4%	0.1%
					エゾハルゼミ	0.0%	0.0%	0.4%	0.1%
				ヒメハルゼミ属		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
					ヒメハルゼミ	0.0%	0.2%	0.0%	0.1%
				ヒグラシ属		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
					ヒグラシ	5.7%	3.7%	5.7%	5.0%
			ツクツクボウシ族			0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
				ツクツクボウシ属		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
					ツクツクボウシ	12.0%	14.9%	10.4%	12.7%
			ミンミンゼミ族			0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
				ミンミンゼミ属		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
					ミンミンゼミ	6.6%	7.5%	6.8%	7.0%
		チッチゼミ亜科				0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
			チッチゼミ族			0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
				チッチゼミ属		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
					チッチゼミ	0.0%	0.2%	0.4%	0.2%

※状況により種まで同定できていない場合、その上位までの同定にとどまっている場合があります

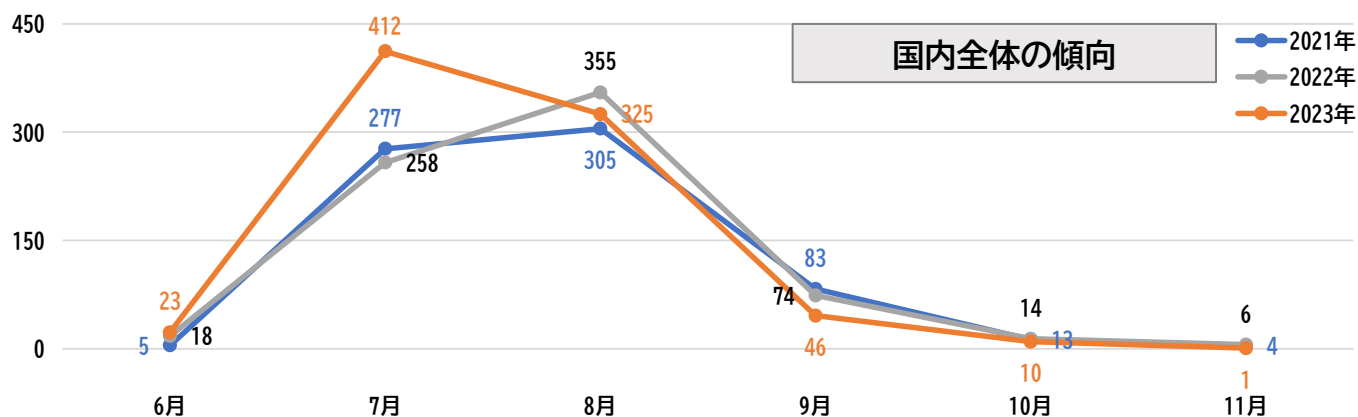
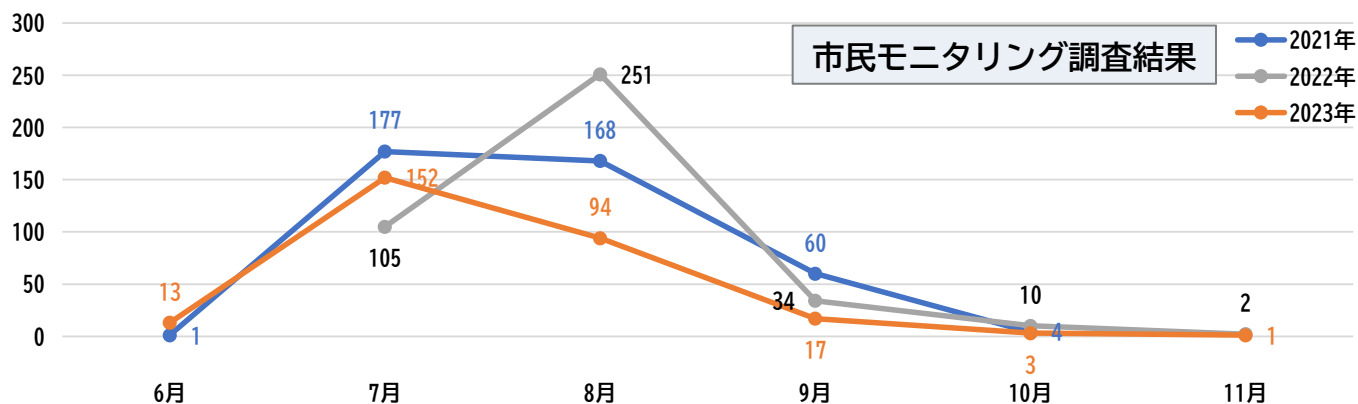
これまでの調査の結果の振り返り ～県別観察報告状況～

- 2023年度の生物全体の報告数は、ほとんどの県で2022年度より減少していますが、唯一、福井県では増加しています。
- セミの報告数も、生物全体と同様に減少傾向が強いですが、富山県では横ばい、長野県では増加となっています。



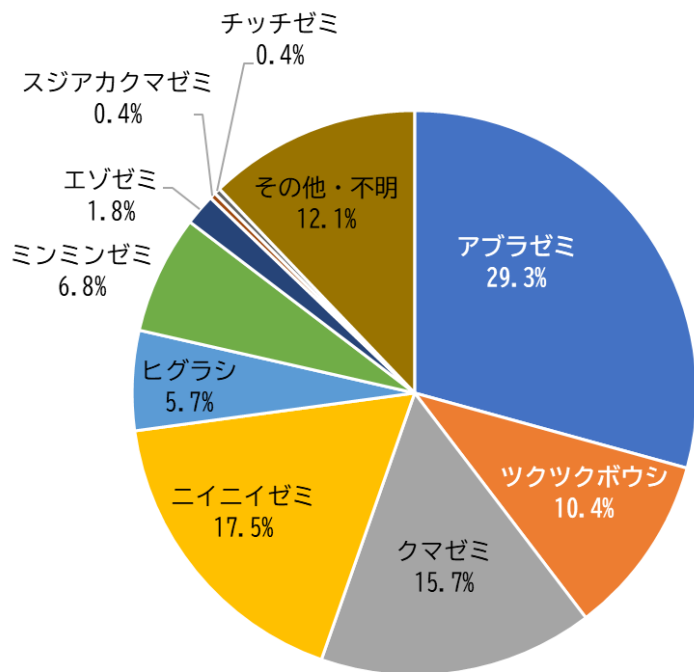
これまでの調査の結果の振り返り ～セミの月別観察報告状況～

- 2023年のセミの月別報告数は、7月が152件で最も多く、8月の94件と合わせて、7～8月の観察報告数が全体の87.9%を占めています。
- 2021年度、2022年度の結果と比較すると、7月は2022年度に比べ報告数は多かったものの、2022年は8月で大きく報告数を伸ばしたのに対し、2023年は大きく数を減らしています。ただし、国内全体の傾向においても、2021年及び2022年は7月から8月にかけて投稿数を伸ばしたのに対し、2023年は本調査と同じく減少傾向となっています。

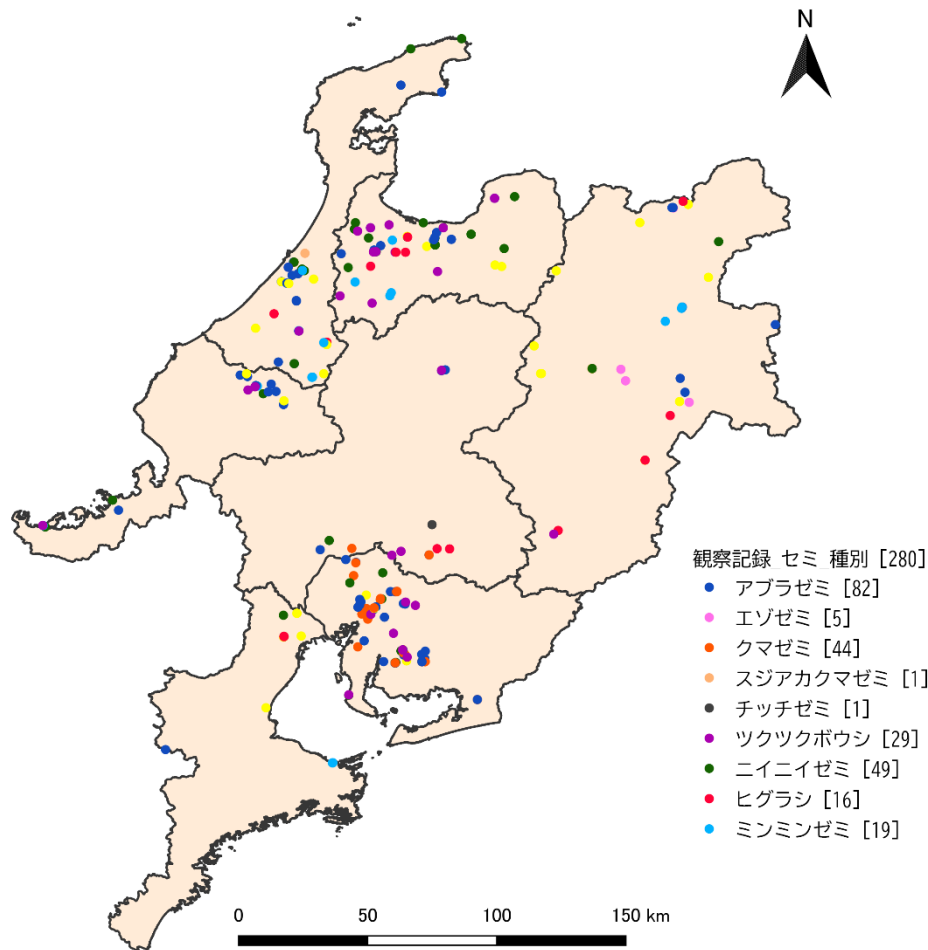


これまでの調査の結果の振り返り ～セミの観察報告状況～

- アブラゼミの観察報告が約3割半数と最も多く、日本海側・太平洋側に関わらず広く観察報告がありました。
- クマゼミは愛知県など、太平洋側での観察報告が多くみられました。



セミ観察報告数（中部7県：計280件）

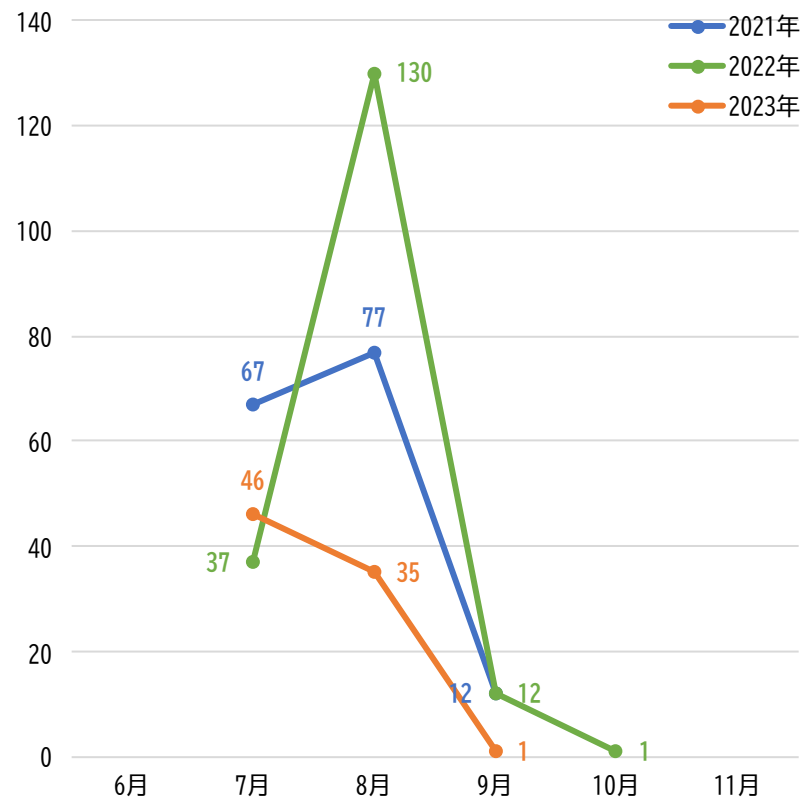
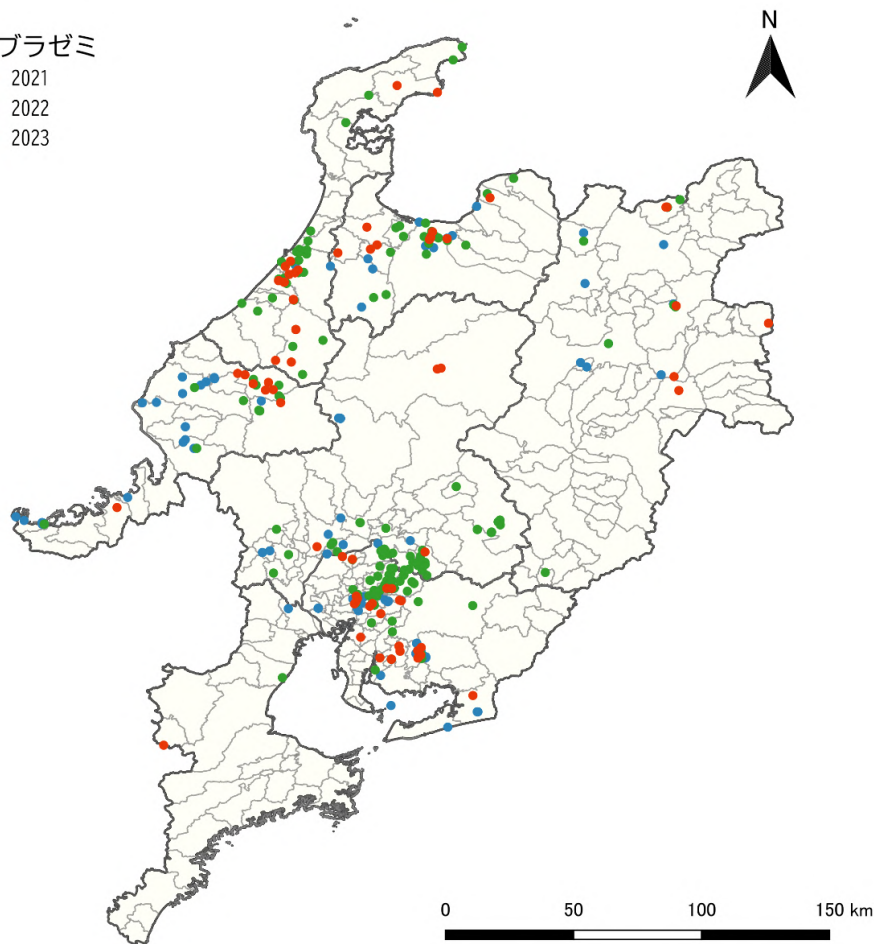


これまでの調査の結果の振り返り ～セミ種別の観察報告分布・月別観察報告数 アブラゼミ～

- アブラゼミの分布は、太平洋側や日本海側ともに幅広く観察されています。
- 月別観察報告数は、2022年度までは7～8月にかけて増加していたが、2023年度は減少傾向にあります。

アブラゼミ

- 2021
- 2022
- 2023

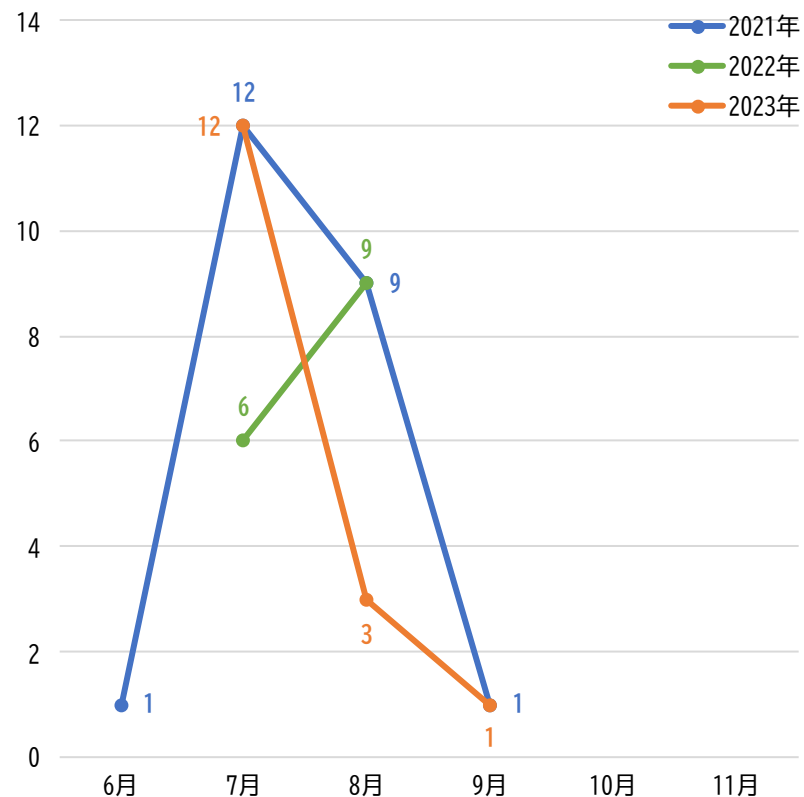
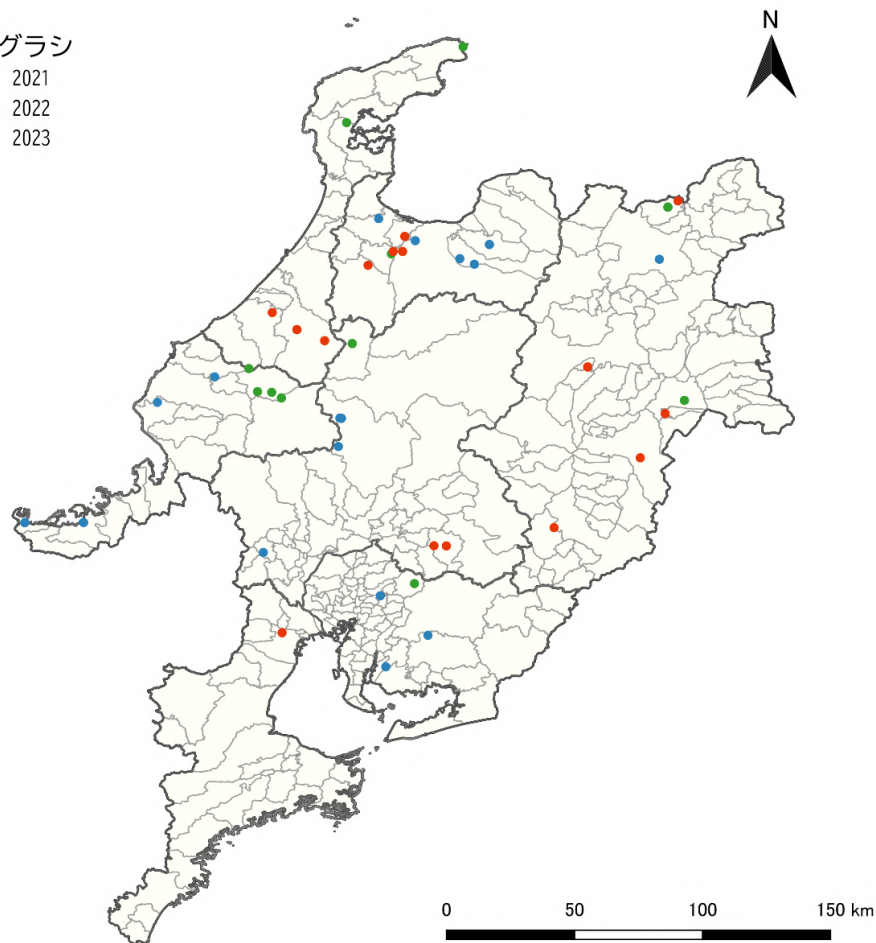


これまでの調査の結果の振り返り ～セミ種別の観察報告分布・月別観察報告数 ヒグラシ～

- ヒグラシの2023年度の観察分布は、2022年度までと比べ、広域で観察されています。
- 月別観察報告数は、例年より7～8月にかけての減少が大きいです。

ヒグラシ

- 2021
- 2022
- 2023

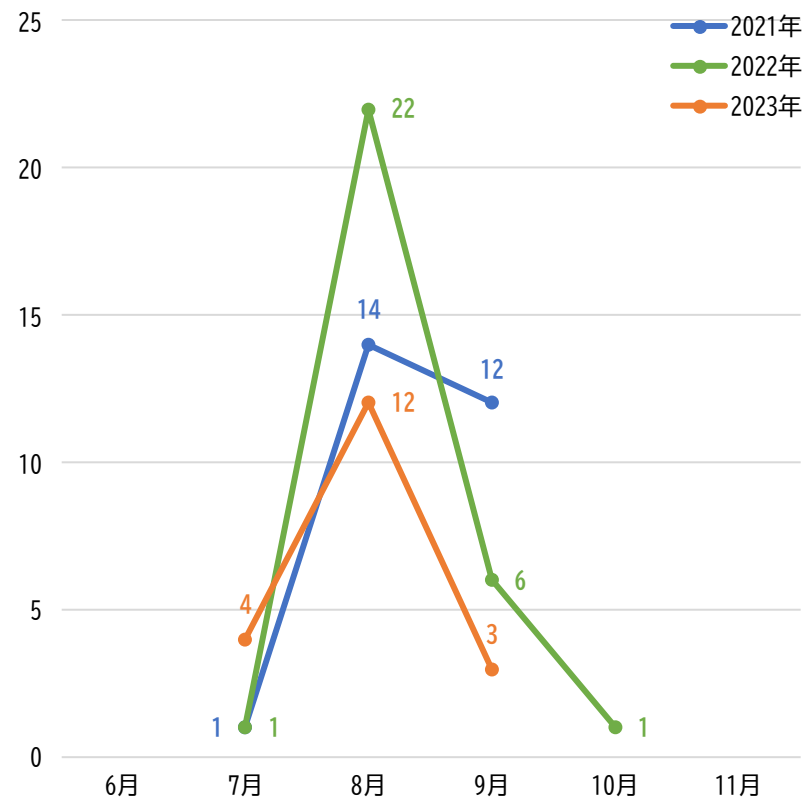
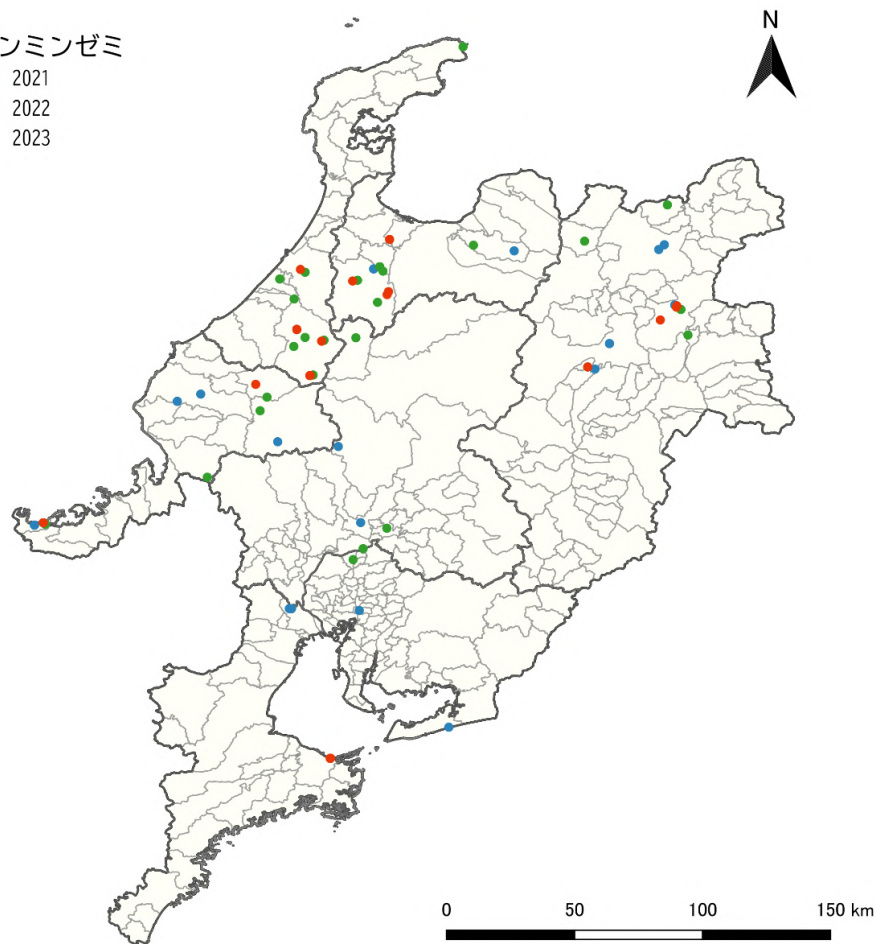


これまでの調査の結果の振り返り ～セミ種別の観察報告分布・月別観察報告数 ミンミンゼミ～

- ミンミンゼミの分布は、日本海側で多く観察されています。
- 月別観察報告数は、8月がピークとなっています。

ミンミンゼミ

- 2021
- 2022
- 2023

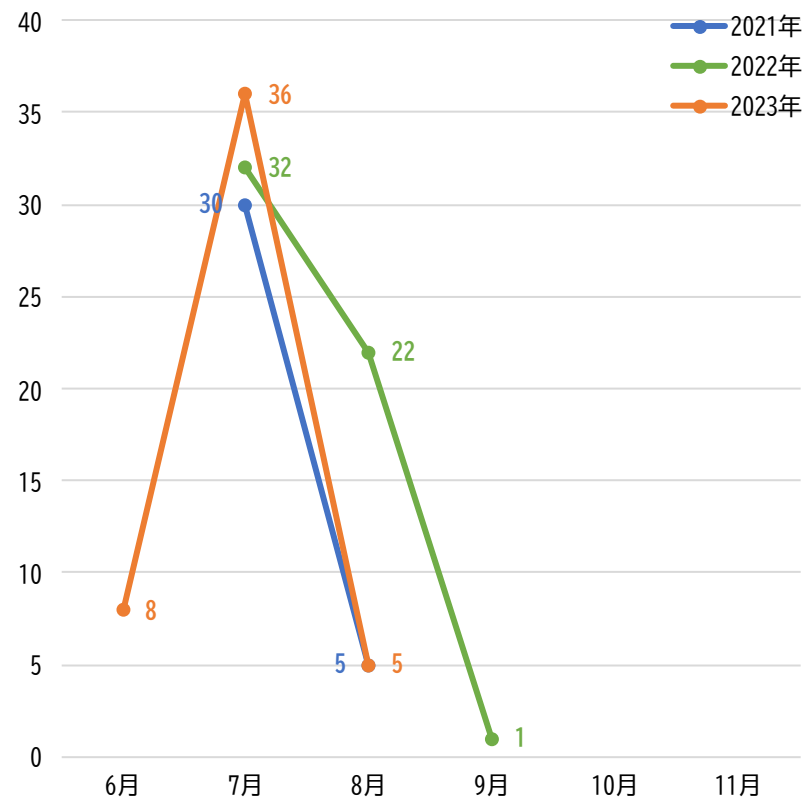
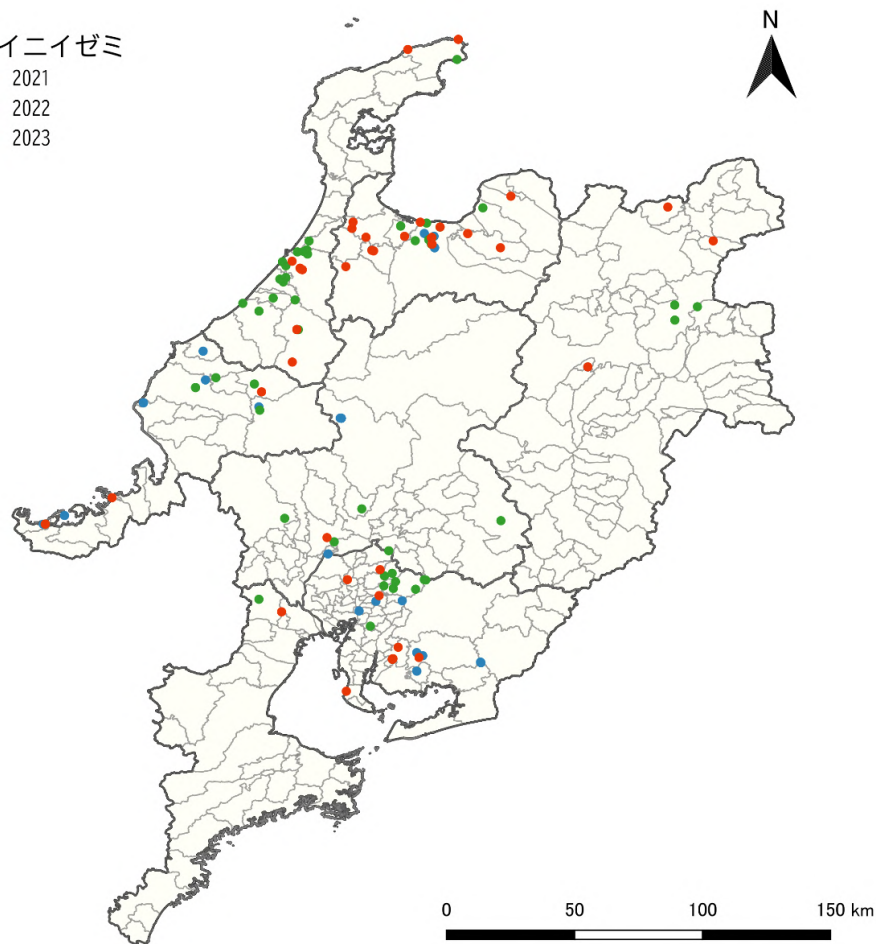


これまでの調査の結果の振り返り ～セミ種別の観察報告分布・月別観察報告数 ニイニイゼミ～

- ニイニイゼミの分布は、日本海側がやや多いですが、2023年度はより広域に観察されている。
- 月別観察報告数は、7月がピークですが、2023年度は2022年度と比べ減少幅が大きいです。

ニイニイゼミ

- 2021
- 2022
- 2023

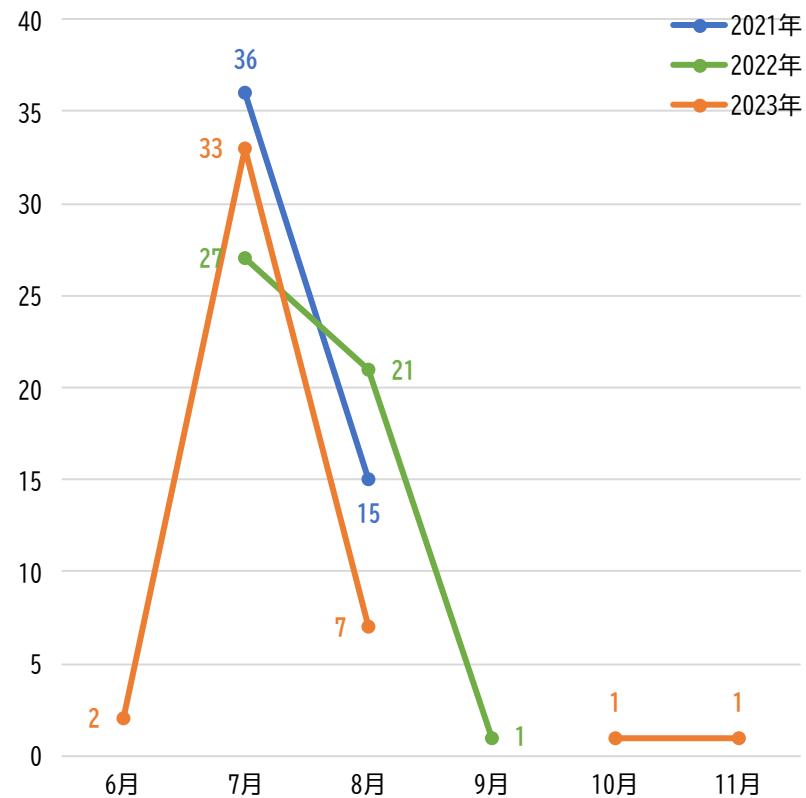
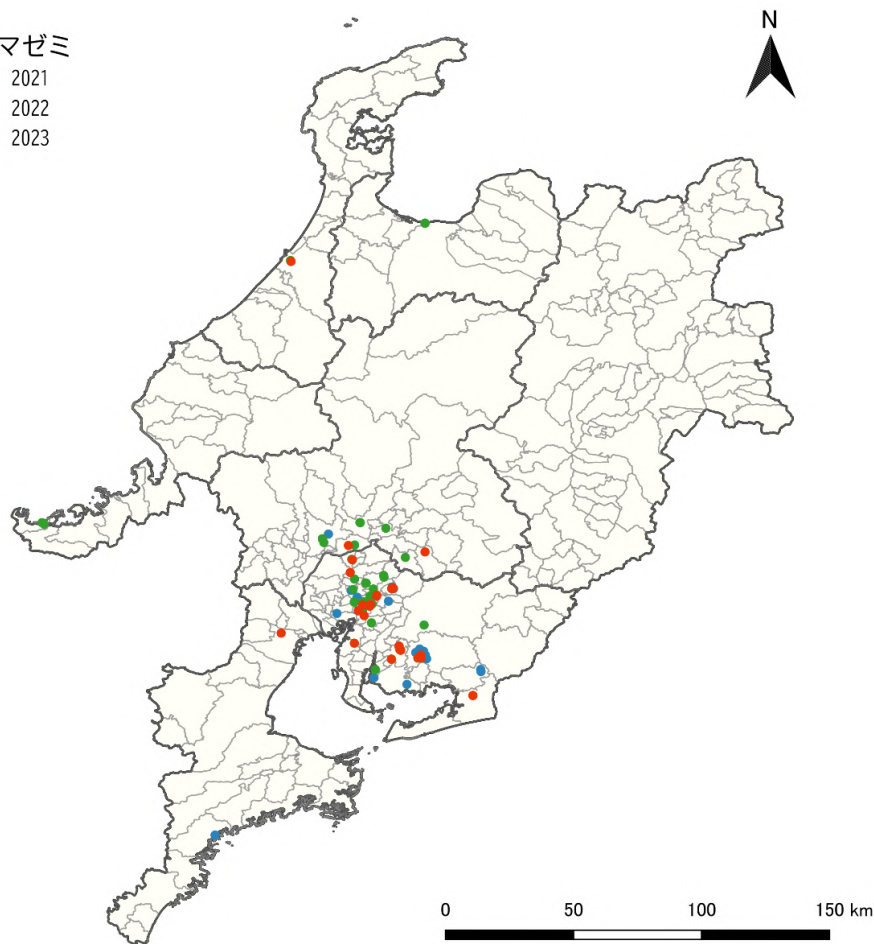


これまでの調査の結果の振り返り ～セミ種別の観察報告分布・月別観察報告数 クマゼミ～

- クマゼミの分布は、太平洋側に集中しています。
- 月別観察報告数は、7月をピークに、その後大きく減少しています。

クマゼミ

- 2021
- 2022
- 2023

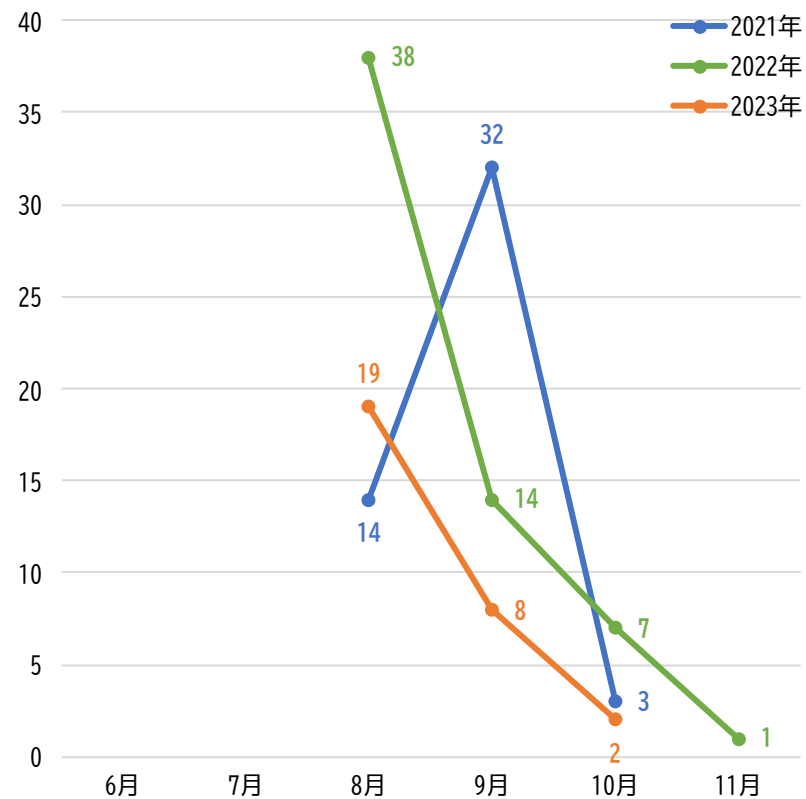
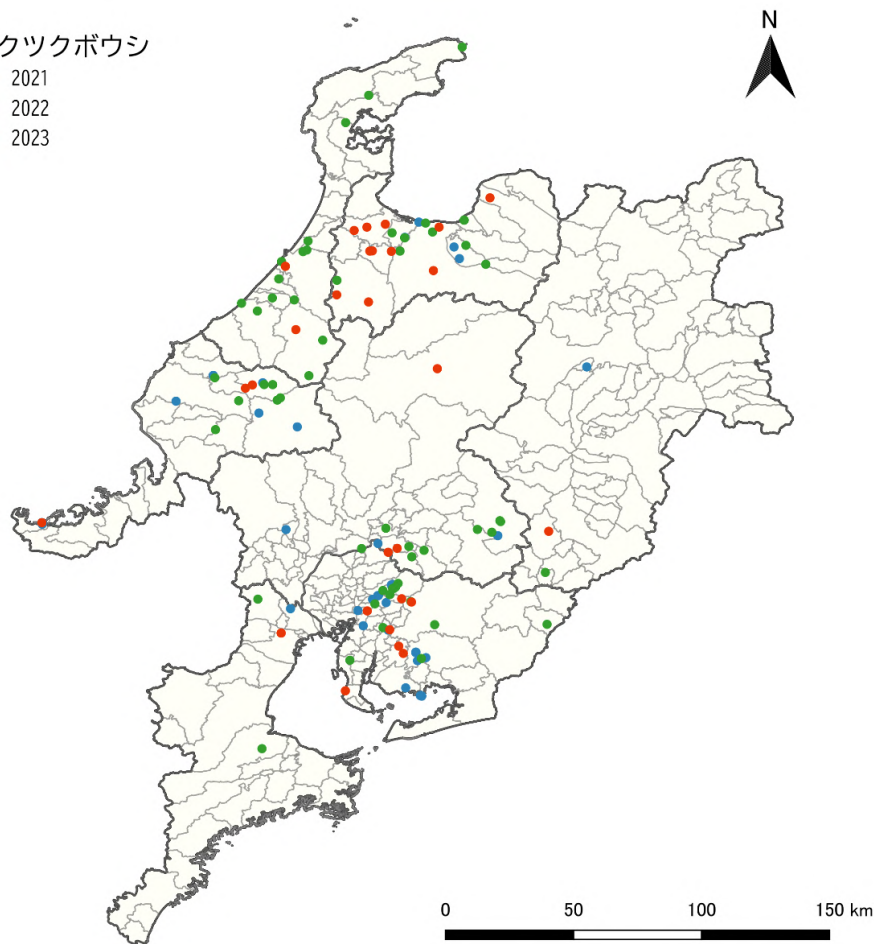


これまでの調査の結果の振り返り ～セミ種別の観察報告分布・月別観察報告数 ツクツクボウシ～

- ツクツクボウシの分布は、太平洋側や日本海側ともに幅広く観察されています。
- 月別観察報告数は、8月の初観測をピークに10月ごろまで観察されています。

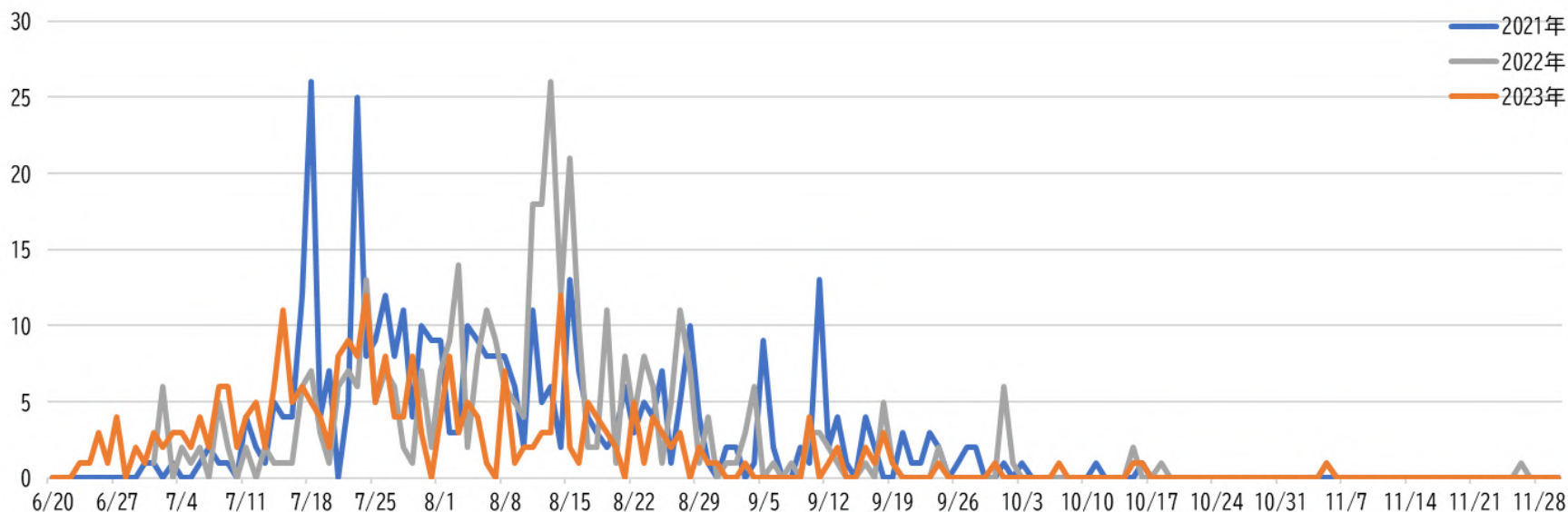
ツクツクボウシ

- 2021
- 2022
- 2023



これまでの調査の結果の振り返り ～セミ観察報告の日別推移～

- 2023年度調査の1日あたりの最多観察報告数は、8月14日の12件。7月半ばから8月半ばにかけての観察報告が多いです。実施期間164日に対し、79日（48.2%）で観察報告がありました。
- 2022年度と比較すると、7月半ば頃は報告数は多くありましたが、8月上中旬の報告が伸びなかった傾向にあります。
- 初観察は、すべての種において2022年度よりも早くなっています。



種名	初観察報告日		
	2021	2022	2023
アブラゼミ	7月6日	7月2日	7月1日
クマゼミ	7月7日	7月2日	6月27日
ニイニイゼミ	7月1日	7月1日	6月23日
エゾゼミ	7月23日	7月19日	7月17日

種名	初観察報告日		
	2021	2022	2023
ヒグラシ	6月30日	7月22日	7月5日
ミンミンゼミ	7月17日	7月27日	7月23日
ツクツクボウシ	8月6日	8月10日	8月5日

これまでの調査の結果の振り返り ～定点別の調査報告数～

- 2023年度の調査より、調査実施前の広報において参加者に「過去に調査した場所と同じ場所での調査」への協力を呼びかけ実施したことから、セミの観察報告数の多い特定地点における経年比較を行いました。
- 分析にあたり、特定地点の範囲は三次メッシュ（1km四方、都市基幹公園の基準面積10haに相当）としました。

【安城市和泉町（愛知県）期間全体】

安城市和泉町（愛知県）

【期間全体】

観察報告（2023年度）_セミ

- アブラゼミ
- クマゼミ
- ツクツクボウシ
- ニイニイゼミ
- ヒグラシ
- ミンミンゼミ

観察報告（2022年度）_セミ

- ▲ アブラゼミ
- ▲ クマゼミ
- ▲ ツクツクボウシ
- ▲ ニイニイゼミ
- ▲ ヒグラシ
- ▲ ミンミンゼミ

観察報告（2021年度）_セミ

- × アブラゼミ
- × クマゼミ
- × ツクツクボウシ
- × ニイニイゼミ
- × ヒグラシ
- × ミンミンゼミ



- 安城市和泉町におけるセミの観察報告状況は左図のとおりです。
- アブラゼミやニイニイゼミが多く観察報告がされており、川沿いの緑地に集中している。特に、6月～7月での観察報告がほとんどであり、観察場所について調査年による大きな違いはみられない。

これまでの調査の結果の振り返り ～調査結果のとりまとめ～

- 調査プロジェクトへの登録ユーザーは年々増加傾向にあり、2023年度543名（2022年度+243名）となっています。
- セミの観察者は70名で2022年度より増加したものの、観察数は280件と減少（2022年度-122件）しています。特に夏休み等で観察数を伸ばす7月後半から8月中旬において伸びなかったことや、例年はあった大きく投稿数を伸ばすピーク日（例年は観察数25件を超える日が複数日見られたが、2023年は12～13件にとどまった）がなかったことなどが影響しています。この傾向は国内全体でも近い傾向にあり、8月の観察数が7月の観察数を下回っています。
- ユーザーのリピート率は3年すべて参加が17.1%、2年参加が15.7%の計32.9%となっている。一部のユーザーにとっては毎年のイベントとして定着しつつあります。
- 延べ1,000件以上のデータが蓄積されており、可視化することで、経年比較も可能になります。例えば、種別の傾向では、アブラゼミを除けば、2023年度は2021年度に近い傾向であった。また、分布については、3か年度で近い傾向が示されています。